寄稿

湖南省藍山県過山系ヤオ族（ミエン）の祭祀儀礼にみる盤王の伝承とその歌唱

廣田律子

はじめに

本論では、過山系のヤオ族（ミエン）に伝承されている還家愿儀礼を事例として、還家愿儀礼全体を貫いている主題を明らかにすることを目的とする。

儀礼の実践の中に見られる盤王に関係するすべての事柄を取り上げ、盤王の伝承が儀礼にどのように影響を及ぼし機能しているかを明確化することから始める。

中でも儀礼を構成する盤王愿部分については、詳しい儀礼の執行程序を示し、問答形式の歌唱に注目しその意義について考える。

還家愿儀礼の主題を展開させ、ヤオ族の全儀礼体系に通底する儀礼的世界観の解釈にまで言及したく考える。

一、調査地域と調査儀礼

ヤオ族は中国の湖南省・広東省・広西チワン族自治区・貴州省・雲南省・ベトナム・タイ・ラオスの山地に分布し、中国では

言語や文化の上で異なる集団がヤオ族とまとめられて称され、約二六〇万人の人口を有する。本報告は湖南省の西南に位置し広東省に隣接する藍山県に居住する過山系ヤオ（ミエン）族を調査対象としている。過山系のヤオ族は焼畑耕作を主な生業とし、犬祖神話と渡海神話を伝承し、男性は祭司としての資格を得る通過儀礼を行なう点等に特徴がある。藍山県は約一八一平方キロメートルの面積で、三五万人の人口（二〇〇五年現在）のうち漢族が大半を占め、ヤオ族は約二パーセントに過ぎない。藍山県には十五郷あり、そのうち六郷にヤオ族が衆居する。

藍山県の滙源郷湘藍村の祭司が行なう儀礼ですでに調査を行なったのは、祭壇に神像画の描かれた軸を掛けて行なう還家愿儀礼（祭司になるための儀礼及び願ほどきの儀礼）、度戒儀礼（祭司の最高位を得るための儀礼）、道場儀礼（葬礼）のほか、治病のための儀礼、符を授ける儀礼、神像画に魂入れを行なう儀礼、年中行事の春節及び除災招福を目的とする送船儀礼等がある。そのほか建築の日取り等吉日を選ぶ場面にも出会った。時期にもよるが、祭司の家で聞き書き調査を行なっていると日に何回も儀礼を依頼する電話がかかってくる状況である［ヤオ族文化研究所　二〇一一：八〇–九一］。

ヤオ族の儀礼は、その規模の大小にもよるがテキスト（経典）の読誦と口頭による唱えごと、発行される文書、マジカルなステップ（罡歩）、マジカルな手の表現（手訣）、符の作成、舞踏等を重要な構成要素として成立している。

儀礼の進行に欠くことのできないテキストは、漢字で表記され、通過儀礼に関する写本、儀礼の式次第を記した写本、儀礼に用いる文書類の凡例を収めた写本、神歌に関する写本、神々の呪文に関する写本、符・罡歩・手訣を解説する写本、吉日を選ぶ暦、祭司の受礼の状況を記したもの等が含まれ、内容からは符書・賞光書・伝度書・請聖書・意者書・歌堂書・超度書・暦書等のジャンルに分類できる［神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：四七–五六］。

二、還家愿儀礼

儀礼の主題を明確にするために、本論では藍山県所城郷幼江村の盤家において二〇一一年十一月十六日～十一月二十一日（旧暦十月二十一日～二十六日）に行なわれた還家愿儀礼を事例とする。盤家の跡継ぎである盤栄富とその妹婿の盤明古、そして盤栄富の父の妹の夫である盤林古（故人）とその子で栄富にとってはいとこである盤継生・盤認仔・盤新富の三兄弟、計六名が受

礼者となり祭司となる法名を得、家を継ぎ先祖の祀りを行ない、自分も家先単に加えられ祀られる資格を得るために行なわれる掛三灯儀礼が中心となる。さらに、盤家では一九三〇年代に流行病によって七人が亡くなる不幸があり、その時に願を掛けたがずっと願ほどきの儀礼を実施できずにおり、二〇一一年にも願を掛け願ほどきの儀礼を行なうことを約束したので、願掛けが成就したことに対する願ほどきの儀礼、さらなる願掛けの儀礼、さらに盤王を祀る儀礼が行なわれる。三人の祭司が招兵師・還愿師・賞兵師・掛灯師と称し、その弟子たちと共に役割を分担し、祭祀を行なう。そのほかに供物を準備し、儀礼の段取りを取り仕切る主厨官、文書作成を担当する書表師、歌を担当する歌娘、若い男女三名ずつの三姓単郎と三姓青衣女人、嘩子方の笛吹師・鑼鼓師等の役割がある［神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一二：二三―一一六］。

祭場は盤栄富宅の庁堂において行なわれ、入口入って正面右側に盤栄富の先祖を祀る常設の祭壇（家先壇）があり、中央に祭壇が設えられ、壁には元始天尊の左右に道徳天尊、霊宝天尊を配し、この三清を中央とし、左に聖主・太歳・十殿・李天師・地府・大海番・海番張趙二郎・把壇師、右に玉皇・総壇・張天師・三将軍・天府・鑒斎大王の神像の描かれた十七種二十二軸が掛けられる。[1] 祭儀の進行に従って、先祖を祀る壇には紅紙の切り紙が掲げられたり、七星姐妹を祀る祭壇や開天門の儀礼を行なうための場等が加えられる。祭儀の後半の盤王を祀る儀礼の祭壇は前半と一変し、神像画の軸は外され、正面に盤王を象徴する紅紙を切り抜いた紅羅緞が貼られ、丸ごと豚一頭が供物として並べられ、その上にちまきが置かれ、切り紙の花旗が挿される。

三、還家愿儀礼の程序

神像画の軸を掛けて行なわれる儀礼の度戒儀礼・還家愿儀礼・葬送儀礼は、規模の大小はあるものの儀礼の骨格をなす基本構造は一致し、祭司が祭場の準備を整え、開始の酒を飲み、祭司の資格を告げ、神を招き、祭司の師匠の助けを求め、神に祭りの目的等を伝え、神を喜ばせ、叙任の儀礼を行ない、神に紙銭等を献上し、願掛けをし、願ほどきをし、神を送り、師匠に感謝し、ねぎらいの酒を飲み終了する構成をとる。それぞれの儀礼の目的に合わせ、この骨格に特徴ある肉付けがなされる［廣田　二〇一三b：一―二五］。

還家愿儀礼程序表(2)

日付	大儀礼名	内容
11／16	**落兵落将**	祭司各自が連れて来た陰界の兵を施主の家先壇に入れる。
11／16	脱鞋酒	祭司と施主と厨官が酒を飲む。
11／16	做紙馬	神に献上する紙銭作り。
11／16	石鑿銭酒（做紙酒）	さらに手伝いの人も交え酒を飲む。
11／16	写愿簿	家先単作り。
11／16	紙馬進堂	祭司が紙銭を家先壇に置く。
11／16	**落脚酒**	祭司及び受礼者、厨官、歌娘等が酒を飲み、祭司は自身の資格、儀礼の趣旨説明を行なう。
11／16	**掛聖**	神像画の軸を掛ける。
11／16	冷排盞	厨官が供物盆を出し礼拝。
11／16	点香	厨官が線香灯明を家先壇に供える。
11／16	羅鼓開始	囃子方の鳴り物が始まる。
11／16	恭賀主家	祭司から施主への祝金が準備される。
11／16	昇香	厨官が祭壇を整え、祭司が線香を壇に供える。
11／16	安祖先（安家先）	分家に香炉を分け祖先を迎える。
11／16	接外祖	妻方の祖先を迎える。
11／16	写家先対聯	書表師が対聯を準備する。
11／16	**請聖**	祭壇に神々を招聘し、儀礼の目的、経過、式次第を説明。祭場を清める。
11／17	做紙馬	紙銭作り。
11／17	添香	厨官が線香と灯明を供える。
11／17	準備五幡	五穀幡を準備。

11／17	入席	囃子方が演奏。
11／17	**請聖**	神々を祭壇に招聘し、儀礼の経過、式次第を説明。
11／17	封斎	斎戒の開始。
11／17	**掛家灯**	祭司となる通過儀礼。
11／17	入席	囃子方が演奏。
11／17	做紙馬	紙銭作り。
11／17	**開壇還愿**	神々を招聘しあらためて願が伝えられる。壊れた盆を修復し再び陰兵の受け入れができるようにする。願ほどきが行なわれる。
11／18	招兵愿	神兵を招き、五穀豊穣を祈願して行なわれる。
11／18	入席	囃子方が演奏。
11／18	招兵愿	天の門を開き神兵を招き、五穀豊穣を祈願して行なわれる。
11／18	還招兵愿	兵を楽しませるために行なわれる。願ほどきが行なわれる。
11／18	**大運銭**	献上される銭が届けられる。
11／18	送孤神	孤神を送る。
11／18	鑒牲	豚を犠牲とする。
11／18	**謝師**	師匠に感謝する。
11／18	鑒香	線香を供える。
11／18	**収聖**	神像画を片付ける。
11／19	盤王愿	盤王に感謝し行なわれる。
11／20	盤王愿	盤王に感謝し行なわれる。願ほどきが行なわれる。
11／20	**拝師**	師匠に感謝する。
11／20	**散袱酒**	祭司、歌娘、厨官等がテーブルに着き、それに対し受礼者が礼拝。

11／20	散袱拝師	祭司に対して受礼者が礼拝。
11／20	唱賀歌	歌娘が歌い言祝ぐ。
11／21	分紅	厨官が供物の肉を分配。
11／21	**拆兵**	祭司は家先壇から自身の兵を取り戻し、帰り仕度をする。
11／21	奉倉庫	倉庫を作る。
11／21	上馬酒	最後の酒盛り。

四、願書と願ほどき

盤王への祭祀の本質を理解するために、施主の家で以前立願され成就された願をほどく行為に着目する必要がある。かつて立願した状況が記された願書は、一つ一つの願を表わす紙を丸めたものと一緒に竹筒に入れられ、先祖を祀る祭壇に置かれていたが、還家愿儀礼の際に取り出される。さらに新たに作成された盤栄富の家先単の最初の頁には願書の内容が筆写される。

願書

①辛未年七月十四日出心許上香火良愿白帋忿[馬六十3]

②　共日盤王[4]

③辛卯年三月廿九日出心伸上香火良愿

④許上招兵良愿　点信

⑤　共日盤王

願書の①～⑤部分の内容について趙金付、盤栄富に行なった聞き書きを踏まえて以下に説明する。

①について、祭司の盤喜古と盤栄富の父の陞財（一九二〇年十二月十七日生、二〇〇一年五月三十日没）は、かつて陞財十四歳の頃、陞財の父明富を含む七人が流行病で死亡する不幸があり、この時大願が掛けられたが、この大願成就の願ほどきの儀礼を行なう件について何回も相談を行なった。願書は文化大革命の際消失してしまったので、当時の記憶を呼び覚まし、辛未（一

九九一年）七月十四日に、大願成就にあたり香火良愿の願ほどきの祭祀を行ない紙馬六十份を献じるとの約束が祭司の盤喜古により記された。この時すぐに願ほどきの儀礼を行なうことができないことを伝える法事が執り行なわれたという。

②について、願ほどきの儀礼の際に盤王に感謝し加護を祈る盤王愿の祭祀も行なうことの約束も記された。

③について、願ほどきの儀礼を行ないたいという陞財の生前の強い意志を継ぎ、栄富は種々な問題を乗り越え、経済的にも条件を整えることができたので、辛卯（二〇一一年）三月二十九日に、一九九一年七月十四日に約束したことが延長されていることと願ほどきの儀礼を行なう意思を固めたことが祭司の盤保古によって記された。

④について、さらに願を掛け、招兵良愿の願ほどきの祭祀を行なうことの約束も記され、儀礼の祭司を招請する塩信[5]を準備し通知することも記された。

⑤について、願ほどきの儀礼の際に盤王に感謝し加護を祈る盤王愿の祭祀を行なうことの約束も記された。

願を表わす紙を丸めたものは、儀礼の各段階において粉砕され消却されるが、一九九一年に記された祖先の香炉を分け分家するために以前に立願された香火良愿の紙は、開壇還愿の還元盆愿において、二〇一一年の香火良愿と陰兵を得ようと立願した招兵良愿の紙は還招兵愿において、さらに盤王へ加護を祈る願の紙は、盤栄富の家先単の願の書かれた頁と共に盤王愿の送王において、それぞれ消却された。

願書が消却されることで、願掛けと願掛けの際約束したことが果たされ、すべて精算されたことが表わされ、これで願ほどきが成立すると考えられる。さらに願掛けに際して必ず盤王への祭祀を行なうことが約束されている点は見逃せない。[6]

家々で行なわれる立願は、盤王への祭祀契約とも考えられていることは明らかであり、儀礼において実践される願ほどきはこの契約履行といえる。

五、儀礼の実践と盤王

儀礼の実践の中で読誦される盤王に関する内容をもつテキストの記述及び盤王の名が唱えられる呪文について、どの段階で使用されたか、儀礼の進行に従い、儀礼を構成する大儀礼名とそれを構成する儀礼分節を明確にしつつ以下に解説する。

(1)　請聖の三請で読誦される『三座還愿保書』（意者書B-8[7]）の内容

元盆良願宝書部分[8]

許上上壇兵馬[9]六十忿、下壇兵馬六十忿、福江盤王聖帝六十忿、五龍司命灶君六十忿、宅堂土地六十忿、宗位宗祖家先六十忿、神王神將六十忿、仙姑姊妹六十忿、部籙眾兵六十忿、扶童小將六十忿、許上寶書立、（中略）上壇兵馬扶歸大羅塾上、下壇兵馬付歸梅元殿上、福江盤王聖帝付歸福江大廟、五龍司命灶君扶歸黄泥江昆侖大廟、宅堂土地扶歸堂宅殿上、祖宗家先扶歸揚州大廟、（真王真將扶歸飛龍大廟）、仙姑姊妹扶歸仙道大廟、部籙眾兵扶歸梅元殿上、扶童小漿扶歸神王神將身邊、左右扶歸出世廟宮、

請聖は神々を請招する儀礼だが、祭壇前で祭司が『三座還愿保書』を用いて祭祀の目的や進行の式次第等を神々に伝える。この元盆良願宝書部分の記述では、願を掛ける対象となる神名と献上を約束する紙馬の量が並べられている。最初に見える上壇兵馬、下壇兵馬、次に福江盤王聖帝、そして灶神、土地神と続く神[10]に願を掛け六十份の紙馬献上を約束している。さらに神々の所属が挙げられ、福江盤王聖帝は福江大廟に帰属するとある。

(2)　請聖の三清で読誦される『請聖書』（A-32 a）

「請福江」の内容

請上福江盤王聖帝、盤古郎老、聖人合花姐妹、五谷仙娘、左邊金童、右邊玉女、旗良打笘。黄趙二位福仁、盤王脚下、五旗聖衆、諸家請天師、李家李書安、劉一劉二仙童、許願童子、把願判官、磨書磨墨把筆仙童、个人奏到福江大廟、出世廟官

［神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：六二～六三］

やはり請聖の儀礼で読誦される「請福江」からは福江盤王聖帝、盤古郎老、そして以下に続く盤王のグループの神々は、福江大廟に所属することが分かる。盤古は盤王と混同されがちであるが、同じグループと捉えられている。

(3)　掛家灯の昇橈で唱えられる呪文

掛家灯は、祭司となるためのイニシエーションである。掛家灯を構成する儀礼分節の昇橈は、受礼者を老君の腰掛けにのぼらせる内容だが、祭司は受礼者が着ける法服・法冠を載せた腰掛けを入口に運び戸外に向かい次のように唱える。

本方地主、本部廟王、元宵神功、土地公、土地婆、金剛大将、過往神童、求財八保郎君、鑒齋大王、天斗星、七星姐妹、把門将軍、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。

室内祭壇方向に戻り次のように唱える。

元始天尊、霊宝天尊、道徳天尊、玉皇聖主、張天師、李天師、鑒齋使者、十殿閻王、天府地府陽間水府、王霊官、馬元帥、
上路天兵、下落地将、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
総壇太歳、太歳衆官、海番張趙二郎、唐葛将軍、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
三廟聖王、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
陰陽師父（祭司の度戒時の師父名）、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
上壇兵馬、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
下壇兵将、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
福江盤王、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
五竜司命灶君、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
宅住竜神、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
衆祖家先、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
神王神将、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。
仙姑姐妹、今日衆法補掛三灯。当天当地、昇老君之橈、大家為本作証、証明、証明。

合計三回唱えるが、一回目二回目は順に、三回目は仙姑姐妹から元始天尊へ逆に神名が唱えられる。[11]

祭壇に掲げられる軸に描かれた神々はもとより道教系の神々、梅山系の神々、福江盤王、灶神、土地神、種々な民間信仰の神々の名が見えるが、起源を異にする諸神が呼び出され、受礼者が三灯を点し、老君の腰掛けにのぼるのを証明する役割を担うとされる。老君の腰掛けとあるように老君は法の師と考えられている。[12]

(4) 開壇還愿の接三清で読誦される[13]『請聖書』（A−32 a）「盤古出世」の内容

盤古出世是何日、盤古出世是何時。盤古出世是何天、几个金童在河邊。盤古[14]出世是辰日、盤古出世是辰時。盤古出世在西天、
両个金童在両邊。両个金童玉女鬼、裙脚一条水大花。身穿羅裙十八副、一双裙帯九斤麻。盤古得病是何日、[15]盤古得病是何時。
盤古何年何月死、留得何年何月埋。几百貫銭請和尚、几僧禮拜玉門開。何人挑水歸洗面、何人載剪做孝衣。盤古得病是何日、
盤古得病是何時。盤古辰年辰月死、留得辰年辰月埋。三百貫銭請和尚、七僧礼拜玉門開。夫妻挑水歸洗面、匠人裁剪做孝衣。

問説今朝有状請、齊々整々下香壇。〔神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：八三―八四〕

開壇還愿では神々があらためて招聘され願が伝えられるが、祭司によって神々の素性が読誦される。その際、祭壇に向かい祭司の弟子たちはひたすら鈴を振り続ける。「盤古出世」の記述からは盤古は、辰日辰時刻に西天に生まれ、辰年辰月に死に埋葬されたと分かる。

(5)　開壇還愿の接三清で読誦される『請聖書』（A-32 a）「三廟大王」の内容

出世唐王先出世、唐王出世在連州。唐王出世連州廟、香烟裡内出行遊。出世遊師先出世、遊師出世在行平。遊師出世行平廟、香烟裡内你有名。出世五婆先出世、五婆出世在伏霊。五婆出世伏霊廟、香烟裡内聴歌聲。出世盤王先出世々、盤王出世在福江。盤王出世福江廟、香烟裡内好排行。出世五旗先出世、五旗出世厨（下上）在司。五旗出世厨司廟、香烟裡内聴歌詞。聞説今朝有状請、三廟聖王一齊臨。〔神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：八六〕

「三廟大王」の内容からは、連州の唐王、行平の遊師、伏霊の五婆、厨司の五旗と並び、盤王は福江に生まれ、福江廟に帰属するとされる。盤王は地名と結び付けられた三廟大王と総称される神々の一神として列している。

(6)　招兵愿の上光接兵で読誦される『請聖書』（A-32 a）の「盤古出世」（前出）の内容

神兵を招き、五穀豊穣を祈願して行なわれる招兵愿においても前出の「盤古出世」が読誦される。

(7)　還招兵愿で読誦される『賞光書』（Z-23）の「盤王歌」の内容

盤古出世是何日、盤古出世是何時。盤古出世是辰日、盤古出世是辰時。盤古出世在西天、两個金童在両邊。両個金童玉女鬼、裙脚一條水大花。身着羅裙十八副、一双裙帯九斤麻。盤古得病是何日、盤古得病是何時。盤古得病是辰日、盤古得病是辰時。盤古何年何日死、留得何年何日埋。盤古辰年辰日死、留得辰年辰日埋。几百貫銭請和尚、七僧礼拜嶽門開。三百貫銭請和尚、七僧礼拜嶽門開。何人担水歸洗面、何人差前做孝衣。夫妻担水歸洗面、何人差剪做孝衣。聞説朝有相請、齊々正々降香壇。

還招兵愿は兵を楽しませるために行なわれ、「盤王歌」の内容は、盤古が辰日辰時刻に西天に生まれ、辰日辰時刻に病を得、辰年辰日に死にさらに埋葬されたとあり、前出の「盤古出世」に共通する。

(8)　還招兵愿で読誦される『賞光書』（Z-23）の「又接三廟王」の内容

出世唐王先出世、唐王出世在連州。唐王出世連州廟、香煙裡内听歌堂。聞説今朝有相請、齊々正々降香壇。出世遊師先出世、遊師出世在行平。遊師出世行平廟、香煙裡内听歌聲。聞説今朝有相請、齊々正々降香壇。出世五〔浦＋女〕先出世、五〔浦

＋女）去世在伏霊。五〔浦＋女〕出世伏霊廟、香煙裡内听歌聲。聞説今朝有相請、齊々正々降香壇。出世盤王先出世、盤王出世在福江。盤王出世福江廟、香煙裡内听歌堂／聲。[16] 聞説今朝有相請、齊々正々降香壇。出世五旗先出世、五旗出世在厨司。五旗出世厨司廟、香煙裡内听歌其。聞説今朝有相請、齊々正々降香壇。啟請高官本命鬼、又請高官本命神。南斗七星姊妹少、北斗七星姊妹多。

「又接三廟王」も内容は前出の「三廟大王」の内容に共通する。

(9) 大運銭で読誦される『請聖書』（A－32 a）の「領銭呪」の内容

犀牛角叫去袁々、百宝衆官下馬領銭財。領了銭財歸納庫、保安家主万銭財。犀牛角叫起容々、百宝衆官下馬領銭銅。領了銭銅歸納庫、保安家主得團圓。犀牛角叫去連々、百宝衆官下馬領銀銭。領了銀銭歸納庫、保安家主万千年。犀牛角叫去分々、百宝衆官下馬領銀銭。領了銀銭歸納庫、保安家主万無難。敬奉盤王還良愿、人財両盛徳満堂。〔神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：九三〕

大運銭では献上される銭が届けられるのだが「領銭呪」には、献上された銭が倉庫に収められ、施主が言祝がれ、盤王に大願成就の願ほどきが奉じられるとある。盤王は願掛け願ほどきの対象とされている。

(10) 盤王愿の流楽で読誦される『歌堂・意者書』（Z－26）の内容

「点男点女過山根」

在落舡頭跪落船尾　速也速　立斉連州唐王聖帝　下廟行平十二遊師　福霊五〔浦＋女〕聖帝　福江盤王聖帝　厨司五旗兵馬　陽州宗祖家先　立斉大神父母　回頭轉面　寛寛坐落聖席頭上　各人側言听語　側言听言　且听一名大廟霊師　牒出猺人子孫　△音還愿家主　当初以来出処来遊　来由出処　当初盤古開天立地　高王置天　平王置地　又置日頭第一宝　又置七星第二名　又置州庭無万濶　又置江何無万湾　因為前歳以来　景定元年四月初八　良日洪水淹上　上淹三十三天　下淹十八地獄　天下無人　重有伏羲姐妹　陽手遮天下　扶手遮州三十三天　下遮十八閻羅大王　天下真言全無凡人　仙人手拿　一丈二尺鉄棍　行尽天下　全無〇人接代　伏羲姐妹　耐何不得為婚　隔岸梳頭　頭系相結　隔岸種竹　竹尾相連　隔岸焼香　香烟相合　為計姐妹不得為婚　正来行郷出路　路逢烏亀開口　要妹為婚　回轉路頭　姐妹打破烏亀　烏亀轉回烏亀団圓　天下無人為婚　楊梅樹下為婚以了　七朝七夜花孕上身　生下血盆　無名無姓　九州養女把刀分俵　分下一百二十姓之人　安在九州六国　分下十二姓猺人　安在南京十保山頭　年深月久居住　地頭也敗　因為寅卯二年　天地流旱　便有一個老姐　江辺吊魚

口吃青烟　失落紅火　焼了百姓黄杉樹木　安身不住無人遮過　猛人子孫正来処備　十二個大舡　人衆漂遊過海　遊到半夜
三更夜静　戌亥二時　会着狂風　打落波浪里頭　遊舡不得順風　不移大哥拿妹手巾　帖在舡頭　跪落舡尾　許上流羅歌堂
酬神酬意保書　全靠大壇衆聖　三廟聖王　有道有法　大神父母担保人丁　順風也去　舡頭也去　舡尾也行　天风順意　吹上
南海上岸交過了　丁卯歳中　八月十三良日　還恩答謝　勾過歌堂良愿保書　念過大神父母　以前过後種竹有根　種竹有笋之
人　各自分机　居住分上雷古山　伏子連州　住安身落処　年深月久地土又慌　各自分執　遊到湖南道州黄土塘　住居月久
水深地土　又慌又来流郷出路　遊到寧遠西洞北路　黄塘宝塞山　立宅居住　年深日久　地頭也敗　地土又慌　又来遊到桂陽
州　滴山水　立宅居住　年深月久　地土又慌　又来遊到藍山居宅　三十年踏上　四十年踏下　地頭又敗　地土又慌　正来遊
到寧遠九疑　地面安身落処　世今以来△音子孫　行到△地名　打開前歳来虎　后山地脉　立起屋宅一座　挑坭居住　立起大
壇衆聖　敬奉三廟聖王　接代五路香烟　前歳以来　过△月△日△　許上一座歌堂　良願保書　許有三姓単郎　三姓青衣女人
　世今以来　請師到壇　奉還歌堂良願保書　一名大廟霊師　揺鈴請聖　斉臨大听意者　以過請出　三姓単郎　三姓青衣女人
　男人站前女人站後　依古代礼　前者以来有疏有犯　入席三拝　出席三拝　回席一双　世今以来　△有△音子孫法△　有心
○○有心還願　無疏無犯　入席二拝　出席二拝　回席一双　唸大神父母　台頭接拝台頭領拝　寛座聖席　請出男人出唱歌詞
　拝神聖歌詞　引歌出歌詞

（○は不明箇所、△には情況に合わせて語が入れられる）

船先にあり船尾にひざまずきどんどん進む。

連州唐王聖帝、行平十二遊師、福（伏）霊五〔浦＋女〕聖帝、福江盤王聖帝、厨司五旗兵馬、陽州宗祖家先集まってください。大神父母たち集まってください。

きびすを返し、広々とした聖席にお着きください。それぞれ傍らの言を聞き、耳を傾け、私の言を聞いてください。一人の大廟の霊師は、奏上します。瑶人の子孫の某音の者が還家愿を行ないます。始まり由来を述べれば、盤古が天地を創造し、高王が天を造り、平王が地を造り、太陽と月を造り、太陽は第一の宝、また七星を造り、第二の宝とし、また果てしなく広い地方（田）を造りくねくね曲がる川を造る。

そのようだったが、景定元年四月八日のよい日に洪水が起こり、どんどん水があふれ、上は三十三天、下は十八地下まで水があふれ、天下に誰もいなくなり、ただ伏羲と妹のみとなった。天下を手をかざしてみると、手をかざして上は三十三天、

下は十八閻羅大王地下を見るが、まったく誰もおらず、仙人が一丈二尺の鉄の棒を手にし、行くも天下にまったく子孫がいなくなり、伏羲と妹のみとなり夫婦となるしか方法がなくなった。両岸で髪をすけば髪が絡み合い、両岸の竹は互いに繋がりあい、両岸で焼香をすれば煙がまとわりあう。それでも妹は夫婦となるのを拒んだ。まさに進んで行くと、亀に出会う、亀は夫婦となるように勧めるが、妹はきびすを返して亀を打ち割ってしまう。それでも亀は円満に夫婦とさせる。天下に人なく夫婦となる。楊梅の木の下夫婦となった。七日七晩身ごもって血の塊を産むが人ではなく、九州の聖人である養女が刀で塊を百二十の姓の人に分け、九州六国に住まわせる。十二姓の瑶人も分けられ、南京十保山に落ちつく。久しく年を経て住むが、地が壊れた。

寅卯二年に天地は日照りとなり、一人の老女が川べりで魚釣りをし、たばこを吸った。その時、たばこの火を落としてしまい、人々の黄杉の木を焼いてしまった。もう住むことができず、どうにもならず瑶人の子孫は十二姓それぞれ十二艘の船を用意し、大海を渡った。

途中三更の頃、夜も静けき戌亥の頃、風が吹き出し、波が高くなり、船は波に翻弄されぐるぐると回った。兄は妹の刺繍のハンカチを手にし、船頭に船尾にひざまずき大願「流羅歌堂酬神酬意保書」を掛けた。すべての大壇のもろもろの神々、三廟聖王、有道有法の大神父母の神々に人々の命を救い順風で進めるように願掛けをした。すると船頭も船尾も安定し、順風となり、無事南海の岸に上陸できた。丁卯の年、八月十三の良日に願ほどきを行ない「歌堂良愿保書」の祭祀を行ない大神父母の神々に念誦した。

その後代々続き、竹の根と竹の子のように継承された。それぞれ分かれ雷古山や伏子連州に定住した。久しく年を経て土地が荒れ、それぞれ移り住み、湖南道州や黄土塘に至り、さらに久しく年を経て、長い時間を経て土地が荒れ、また移り住み寧遠や西洞北路や黄塘宝塞山に至り定住した。さらに久しく年を経て、さらに土地が荒れ、移り住み桂陽州や滴山水に至り定住した。さらに久しく年を経て土地が荒れ、また移り住み藍山に至り定住した。あっという間に三十年四十年と年が経ち土地が荒れてさらに寧遠や九疑に移り定住した。現在某音（音は姓の系譜による）の某子孫は某所に至り、前に虎後ろに山の地脈に住まいし、泥で家を建て衆神祖先を祀る祭壇を設けた。三廟聖王を敬い祀り、掛灯を行ない代々継承し、以前某月某日に願掛けを行なう「歌堂良愿保書」を行ない、今願ほどきを行ない、三姓単郎と三姓青衣女人によって師に依頼し、祭壇を設け「還歌堂良愿保書」を行なう。一人の大廟霊師は鈴を振り、神々を招き「大聴意者書」を述べる。三姓単郎と三姓

青衣女人は男が女の前に立ち、古代の礼によって、もともとそうであったように心に不都合なことがあり、神に対して犯をおかした場合、入席三拝し、出席三拝し、回席二拝し、今某音の子孫が願ほどきを行なう。心に不都合がなく犯をおかしていなければ入席二拝出席二拝回席二拝し大神父母神に念誦する。祭壇で我らの礼拝に接し壇上で礼拝を受け、ゆっくりと聖席に座し、男人が「拝神聖」を歌い「引歌出歌」を歌うのを受けてください。

この記述は、盤王愿の流楽で読誦されるが、複数の神話が断片的に綴られている。内容は、まず盤古が天を開くとあり、十二姓の瑶人が南京の十保山に住んでいたが、寅卯二年に天災により十二隻の船に乗って海を渡って移住しようとしたが遭難したため、船の舳先でハンカチを使い無事を祈って願を掛けた。そして三廟王の道法により難を逃れ、無事に岸に着き、八月十三日に感謝の願ほどきを行なったとある。

さらに現地の方へのインタビュー[17]によって盤王愿の祭壇に並べられる供儀の豚は全体でヤオ族がかつて海を渡った時に使用した船を表現しているということが判明した。

豚の頭の上に載せられた肉片は、舟の舳先で無事を祈るのに使ったハンカチを表わす。さらにしっぽは舟の櫂、腸は接岸のロープ、肝臓は船の碇、脂肪は帆布を表わす。豚の上に積み重ねられたちまきは帆を表わす葉でくるまれているとされ、その上に挿された旗は盤王の好きな三十六種の花を表わすとされる。

豚の頭に載せられた肉片が命懸けの大願を掛けた時に用いられたハンカチを表現するという知識は、テキストに載せられていないものの、ヤオ族の人々にとっては当たり前に伝承されている知識である。

⑾　盤王愿の流楽で読誦される『意者書・歌堂書』（Z-26）の「又唱福江廟」の内容

一花謝、二花開、一神退位二神来。抛兵踏上福[18]江廟、踏上福江廟上行。出世盤王先出世、盤王出世在福江／西天。盤王出世福江廟／西天、帽帯肖肖朝上江／天。出世盤王先出世、盤王出世在福江／西天。盤王出世福江廟、两个金童在两邊／行。相睹盤王愛相睹[19]、釋迦相暗在江邊／河。盤王坐得三年半、盤王殿／釋迦背上出紅蓮／谷羅。高枱望見齋眉見、龍児画粉在江村／州。盤王年生一對女、一年四季出行之／遊。玉女梳頭不乱髪、聖女梳頭髪乱飛。玉女梳頭是仏様、連着唐王双下為／不了時。出世信王先出世、信王出世不無人／娘。信王出世無衣着、路逢金骨拗遮身。一聲々在福江廟、二聲落馬在壇前。來到壇前同万福、得見伏霊五〔浦＋女〕先在／前。

盤王愿は盤王に感謝し行なわれるが、「又唱福江廟」の内容は、盤王が福江西天に生まれ、福江廟に属し、さらに盤王は三年

半座り続け、盤王は一年に二人の娘をもうけたとある。

⑿　盤王愿の流楽で読誦される『善果書〇乙本』（賞光書・歌堂書Z-16）の「福江廟」の内容（〇は不明箇所、以降同じ）

番々覆々成兩邊、手拿牙笏再來求。起計盤王光起計、盤王起計立春名。黄龍又定五雷孰、傳望五雷轉弍聲。起計盤王先起計、盤王起計閉犁耙。鼠兒過海偷禾種、黄龍含水濕禾花。起計盤王先起計、盤王起計種苧蔴。種得苧蔴[20]兒孫績、兒孫代々綉羅花。着苧蔴唐王先着、着羅／樵盤王先着羅／蕉。唐王着蔴世也好、兒孫代々綉羅花。弍聲々在福江廟、二聲落馬到壇前。来到壇前同萬福、復曹下降監盤筵。

「福江廟」の内容は、盤王が犂を使った農耕を行ない、苧麻を植え子孫が織物を受け継いだとあり、盤王の生業にかかわる神格が見られる。

⒀　盤王愿の流楽で読誦される『善果書〇乙本』（賞光書・歌堂書Z-16）の「解神意」の内容

解神意、歌堂林裡解神愁／思。解得神愁／思神歸去、歸去莫傳還愿頭／時。解神意、歌堂林裡解連州／行平。解得連州唐王聖／行平十二遊師神歸去、去一世不行出廟遊／門。解神意、歌堂林裡解伏霊／福江。解得伏霊五〔浦＋女〕／福江盤王聖帝歸去、弍世不行出廟廳／堂。解神意、歌堂林裡解厨司／楊州。解得厨司五旗兵馬／楊州宗祖家先神歸去、弍世不行廟出祠／遊。桃源丹竹頭、隨根生上尾頭浮／系。瑤人將来做筈子、筈頭落地解神愁／思。筈来定、筈来定過正知安／情。打筈紫領上過、筈頭落地保人民／丁。連州唐王聖帝／行平十二遊師謹把筈、筈頭落地望開陽。伏霊五〔浦＋女〕／福江盤王聖帝謹把筈、筈頭落地望／要開陽。厨司五旗兵馬／公位宗祖家先謹把筈、筈頭落地望開陽。

儀礼では、祭司が「解神意」を唱え、一方弟子は祭壇に向かい、箸で祭壇上に置いた卜具を床に落とし、卜具の表裏で三廟王と総称される神々が満足しているかどうか確かめる。「解神意」には伏霊五〔浦＋女〕（婆）そして福江盤王聖帝が並び、その意思が卜具で解釈され、陽の卦が望まれるとある。

⒁　盤王愿の唱盤王大歌で読誦される『大歌書上冊』（歌堂書Z-19）の「盤王出世」及び「盤王起計」の内容

「盤王出世」

出世盤王先出世、出世盤王在福江／西天。盤王頭帯平天帽、帽帯肖肖朝上天。盤王出世先出世、盤王出世在福江[21]／西天。盤王出世在福江／西天廟、両個金童在両行／邊。盤王出世愛相刻、釋伽相刻在江河／江邊。盤王生得三年半[22]、釋伽背上出石螺／紅蓮。高台望見齋眉鏡、龍見花粉在江村。盤王生得一対女、一年四季出行遊。玉女梳頭不乱髪、圣女梳頭髪乱飛／系。玉

女梳頭是佛樣、随着盤王双下歸／時。要娘買笠娘不買、要娘買傘說無銭／油。得娘十己成郎我、苧蔴庶頭也過年／秋。

「盤王起計」

起計盤王先起計、盤王起計立春名。黄龍又定五雷熟、専望五雷轉一聲。起計盤王先起計、盤王起計閊犁頭／鈀[23]。鼠王過海偷禾種、黄龍含水吩禾蔸／花。起計盤王先起計、盤王起計閊犁梗／鈀[24]。閊得犁鈀也会使、屋底大塘谷扱生／芽。起計盤王先起計、盤王起計立春名／挨。立得春名／挨都足了、屋背苗秧叚々青／齋。起計盤王先起計、盤王起計種苧蔴／系。種得苧蔴／系兒孫績、兒孫世代綉羅花／衣。起計盤王先起計、初發苧蔴／油叶大球／花。苧蔴籽細不成苧、蕉麻籽細便成油／羅。起計盤王先起計、盤王起計閊高枷／機[25]。閊得高枷／機織細布、布面又凋李柳花／系。着苧麻盤王先着苧、着羅唐王先着蕉／羅。盤王着苧世也好、唐王着蕉／羅更請条／娄羅。盤王留得有七格[26]、羅衣手中無本銭。

儀礼分節も唱盤王大歌とあるように盤王を主題とする歌を祭司たちが複数で歌い、盤王はビエンフンと発音されていることを確認した[27]。

「盤王出世」「盤王起計」の内容は、盤王が福江西天に生まれ、犂を使い農耕を行ない、苧麻を植え、高機を使って苧麻織りを行なったとある。

⑮　盤王愿の送王で読誦される『歌堂書』（Z−29）の「送王歌化糸帋用」の内容

白米排上発出外、相送大王出外門／斤。琶板甲上送神去、白米排上発出門／街。白米排上発出外、相送大王出外門／街。琶板甲上送神去、塘鈴杵上掛銅木奐／隨。歌堂也当今日敬、姐妹也当今日送神行／歸。送神去、送神歸去連州／行平。送神歸去連州／行平廟、廟前車対轉遊々／平々。送神去、送神歸去到伏霊／福江。送神歸去伏霊／福江廟、廟前車対轉興々／双々。送神去、送神歸去到厨司／陽洲。送神歸去厨司／陽洲廟、廟前車対轉魁々／遊々。送神去、送神歸去到神州／郷。送神歸去神洲／郷廟、神男神女笑愁々／陰々。送神去、送神歸去到神村／家。送神歸去神村／家廟、神男神女笑烟々／愁々。送神去、送神歸去到神斤／堂。

「送王」では神々が送られ、歌娘が読誦する「送王歌化糸帋用」では神々が帰って行くとされる地名が示され、福江の福江廟もその一つとして挙げられている。

以上儀礼の実践の中で使用されるテキスト等の記述から見ると、盤王は福江西天の地に生まれ、福江廟に帰属し、辰の年辰の日辰の刻が生死の時とされ、犂を使った農耕を行ない苧麻を植え高機を用いて苧麻織りを行なったとされる。

儀礼の実践には、ヤオ族がかつて海を渡り遭難した時に立願をし、救世主の盤王のお陰で難を逃れ、願ほどきを行なったという神話伝承が今なお色濃く反映されていることを見ることができる。

還家愿儀礼の後半部の盤王愿儀礼はかつてヤオ族が盤王との間に交わしたとされる祭祀契約とその履行を再現する儀礼であるといえる。

六、儀礼盤王愿の実践

本稿では還家愿儀礼の後半において行なわれる大儀礼名「盤王愿」部分を取り上げ、儀礼の実践と読誦される文献の内容について解説を加える。

十一月十九日から二十日に実施された大儀礼名「盤王愿」部分の儀礼執行程序のうち重要な箇所を取り上げ以下に示す。

1、（19日7時45分頃〜）庁堂正面に祭壇をしつらえる。

祭壇の様子は、紅紙の切り紙（上から柱歯・石榴花・大紅花・荷花・盤王印・天狗・香炉）、その下に黄紙の切り紙（金魚）が貼り付けられた紅羅緞が正面に飾られる。その両脇に紙銭がつるされている。

供物は、豚の頭部に脂の膜がかぶせられ、その上に肉片・盤王の塩信・碗の灯明・箸の束が置かれる。頭部の両脇には内臓、その脇に胴・足が置かれる。右に二足、左に一足、胴の上はちまきに覆われ、ちまきには色とりどりの切り紙の旗が挿してある。さらに正面には背骨と一足がつるされている。血の入った桶は右に置かれる。

豚の頭部前には、左右に三つずつの碗、中央に香炉碗、左右に米の入った碗・水杯・塩の入った杯が並べられる。

2、（8時20分頃）主厨官が祖先壇に線香をともす。

3、（8時20分頃〜）「剪花酒」を行なう。庁堂に祭司とその弟子、歌娘、主厨官がテーブルを囲み着席し、祭司が盤王愿を行なう施主盤家の願掛けの経緯、願ほどきの実施内容等を説明する内容の「意者」を暗唱する。招聘する神名および祖先の名

を唱える。[28] 神々に献酒後皆で酒を飲む。

4、（10時頃～）祭司は祭壇前で「意者」を暗唱する。

5、（10時10分頃～）祭司は祭壇前で「請盤王」を行なう。この時招聘する神名と神についての叙事文を暗唱する。

6、（10時30分頃～）祭司は祭壇前で献酒および献紙銭し、足りたかどうか卜具で確かめる。

7、（11時30分頃～）祭司は「意者」を暗唱し、神が受け取ったかどうか卜具で占う。

8、（14時10分頃～）祭司は神名を暗唱。神々を招聘するため紙銭三十扛を献じる。

9、（14時15分頃～）「流楽」が開始される。祭司は卜具で占った後、経典の「点男点女過山根」（文献Z-15）箇所が読誦される。

10、（14時25分頃～）「陰声保、陽声気」とされ、祭司は神の声がわたされ歌詞が引き出されたか卜具で占う。この時男女が歌う歌の題が表明される。（文献Z-15を読誦）米が撒かれ、神声がわたされたことを表わし、歌が開始される。歌娘は文献Z-29を読誦歌唱する。〝三姓青衣〟の女性は祭壇前に並ぶ。

11、（15時15分頃～）祭司により上光儀礼が進められる。（文献Z-32ａを読誦）

12、（15時50分頃～）祭司は文献Z-26を読誦。

13、（16時～）祭司は戸口のところで内外に別れて問答(1)を行ない、内は紙銭の金を払い、外は贈り物を表わす楽器（長鼓・笛・沙板・角笛・鈴）を送る。

14、（16時５分頃～）弟子たちは祭壇前で鍛冶屋が橋を架けるための工具を作る様子を演じる。木を切り製材し橋を作る様子を演じる。

15、（16時15分頃～）祭司は手訣で陰兵を派遣し三廟に至る橋を架けることを表わす。卜具で占い、橋が架かったか判断する。

16、（16時20分頃）玉簡は橋を表わし、弟子は橋を平らにする等演じる。文献Z-26を読誦。

17、（17時10分頃～）祭司は神々に献酒を行ない、文献Z-26・『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦。

18、（17時55分頃～）祭司は戸口で内（女性を演じる）と外（男性を演じる）で文献Z-15および文献Z-26を使用し問答(2)を行なう。

19、（18時20分頃〜）外から人を室内に招き入れ酒を勧める。

20、（18時30分頃〜）主厨官等が「做鼓」「置鼓」「試鼓」を演じ、祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦する。

「試鼓」の時祭司は問答(3)を行なう。主厨官は長鼓をもち舞う。舞の動作は瓢洋過海の神話や祭祀の内容、焼畑、儀礼、家作り等を表現する。

その後祭司が「聴鼓」「唱歌堂」を『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦し表現する。

21、（18時40分頃〜）祭司、歌女は戸外に出てそれぞれ『善果書〇乙本』（文献Z-16）、Z-29を読誦する。三姓青衣の女性三名三姓単郎の男性三名は対面して並ぶが、その間を弟子は8の字に回り串歌堂を意味する。

22、（18時50分頃〜）祭司は祭壇正面で『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦し、読誦に神名があがるごとに、弟子は箸で祭壇上から卜具を床に落とし、神に対して供物の数を数え確認したか満足したかを占う。

23、（19時25分頃）祭司は脱童の儀礼を行ない、『善果書〇乙本』（文献Z-16）を読誦。

24、（19時35分頃）祭司は師父に感謝する。

25、（19時45分頃）祭司は神々を招聘し、約束した紙銭を献納する。供物（おかず・酒等七組）を献納する。数を数え確認したか、食べたか卜具で占う。

26、（19時50分頃）祭司は請盤王の声音で歌唱し、神の声（劉三妹娘の声）と歌詞を引き出す。紙銭を献ずる。

27、（21時30分頃）「唱盤王大歌」が開始され、祭司は祭壇前で「意者」を暗唱したのち『大歌書一本上冊』[29]（文献Z-19）を読誦する。「三幡」部分は唱える。『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の本文は、冒頭は問答形式(4)で読誦する。それが終わると祭司二人で左右の頁を分担し読誦が進められる。

「洪水沙曲」を初めとする「曲」がはされまれるがこの時は読誦のメロディーが変わる。

図1　三姓青衣の女性が立ち並ぶ、歌女（右座る）は歌う。

図2　『盤王大歌』を歌唱する祭司たち

「曲」に入る前主厨官が線香を献じ、祭司が沙板が鳴らし、問答(5)があり「拉里連郎里拉利…」の問奏を歌い「曲」の読誦が始められる。

「曲」が終わると『大歌書』の本文部分に戻るが、初めの数頁は問答形式で読誦される。

28、(20日3時頃〜) 祭司が歌娘に鈴を与え文献B-2「四断完了又接鈴歌語」を読誦し、次に歌娘が祭司に鈴をわたすと、祭司は『大歌書一本上冊』(文献Z-19)「接鈴用」を読誦し、歌娘の歌を評価する。

29、(4時40分頃) 祭司は『大歌書一本下冊』(文献Z-20) を取り出すために問答(6)を行なう。

30、(5時15分頃〜)『大歌書一本下冊』(文献Z-20) の初めは問答形式で読誦。「又何物段」部分は全部問答(7)で構成されている。

31、(10時50分頃) 祭司は神々への供物（内臓・紙銭・鈴・碗・箸）を船に積み込む。

32、(10時55分頃) 戸外で三姓単郎三人三姓青衣女人三人は対面して並ぶ。歌娘と男性歌手は「遊愿」の読誦を続ける。

33、(11時42分頃)「打令放船」では、主厨官が心臓の入った碗を運び、酒と箸を並べる。祭司は杯を倒し酒をこぼす。『大歌書一本下冊』(文献Z-20)「解開船櫃放船去」の内容の読誦を続ける。

34、(11時52分頃) 退席は祭司により文献Z-15が読誦されるが問答形式(8)であり、片付けることを神々に知らせる。

35、(14時10分頃〜)「送王」で祭司はまず神々を招聘し、献酒を行なう。

36、(14時35分頃〜) 祭司は神々に約束した紙銭を献上し、足りたかどうか卜具で占う。「做証」してくれたありとあらゆる神々や師父、関係する神霊に対して銭を献じる。拆愿は、すべての願ほどきを完了させるために願掛けの証書を消却させる。

37、(15時5分頃) 祭司は神々に繁栄と五穀豊穣、家畜の増殖、金銀財宝を願う。瘟神、災殃、傷神、耗、七精八怪等の害をもたらすものから守ってくれるように願う。

38、(15時8分頃) 祭司は献酒を行なう。

39、(15時12分頃) すべて紙銭が燃やされ神々に届けられる。祭司は納めたか卜具で占う。

40、(15時24分頃) 祭司は米を撒き、神々を送り去る。

41、(15時25分頃) 祭司は戸外に香炉と水杯を持ちだし、伏せて中身を出し、線香で符を書き、送王を終了する。

七、問答の実践

数多く見える問答形式のやり取りと歌を取り上げ、問答(1)から(8)の具体的内容を以下に示す。

問答(1)の内容は、

どこから来た　鉄の産地の塘村から来た
何しに来た　工具（刀、斧刀等）を作りに来た
いくらかかる　七千八万
八万七千だろ
何しに来た　お祝いに
何をもって来たのか　牛、鴨、鵝をもって来た

である。

状況としては、歌堂が催されると聞きつけ、鉄の産地の塘村から神々が訪れるのに橋を架けるために必要な鉄製工具を作りにさらに供物となる品々を携え祝いにやってきた来訪者と歌堂を催す家の者との問答である。七千八万と言い間違えると八万七千と直し、そこで笑いを誘う。問答の最後には内からは銭、外からは贈り物が交換される。さらに来訪者が招き寄せられると、文献Z-26に「行到州門開鉄舗　行過県門得日焼（行きて州門に至れば鍛冶屋を開き、行きて県門を過ぎれば日焼を得る）」とあるように鍛冶屋を開く。ドラを伏せた上に鉄の焼き入れに使う水を表わす杯、炉を表わす碗を置く。笛でふいごを表わし、炉で鉄を熱し、風を送り炉の温度を上げ、鉄を打ち、焼き入れをし、鉄製品を作る工程を演じる。さらに鍛冶屋はシンバルの鉄帽をかぶる。連州路、行平路等祖先神が祭場に至る道を直すのに必要な鎌・斧・鋸を作製することを演じる。牛の角笛の牛角で牛を表わし、卜具で刀を表わし、牛を殺し土地神を祀ることを表現する。板を組み合わせたカスタネットのような沙板で鴨を表わし、ドラで鵞鳥を表わす。紙銭を燃やし土地神を祀る。笛を天秤ばかりに見立て、牛に見立てた牛角の重さを量ろうとする。この時の問答では、

どのくらいの重さか　三百斤の骨、四百斤の肉

図3　弟子たちが鍛冶屋となり橋を架ける工具を作る。

いやいや、四百斤の肉、三百斤の骨だろ、多すぎる

等といい、周りは皆笑う。引き続き作製した刀・斧・鋸を使い木に見立てた杖を切る動作をするが、まず杖を倒しどこまで倒れて至るか確かめる動作を行なう。その後わざと弟子のいる方に杖の木を切り倒し弟子が転び笑いを誘う。倒れた木を製材し橋を作る様子を表現する。問答は、間違いをいい、それを訂正する言葉の掛け合いで笑いを誘う。

問答(2)は文献Z-15の「題目主家問答」と題された部分と文献Z-26の同様の内容の収められている部分を併用して行なわれている。初めは文献Z-15を使用する。七言上下句四句をひとまとまりとして問答形式を取り、反復が多用されている。

題目　主家問答

伏　問　仔　問仔那州那県人／郎
問郎行来做那事　門前打鼓唱敬堂／行
不　使　問　正是蓮州蓮大親
蓮州半嶺日便夜　問没可憐不可憐
伏　問　仔　問仔為那路頭挨
天光当当不早到　三便半夜正行来
傳　報　妹　郎来因為路遥遠
蓮州半嶺日便夜　○郎連也到門前
伏　問　仔　問仔那州那県人
天光当当不早前　三更半夜到門前
傳　報　妹　細句劉三説報娘
聴聞王主人還聖愿　郎来今夜○敬堂
借　問　仔　借問遠郷有意郎
得知主人還聖愿　那人説報唱敬行
早得三朝郎曉○　主人有意仔有心
小郎一心来○愿　莫怨小郎行路深

難　為　仔　難為貴仔到娘郷
難為風流行夜路　本当難怪路頭長
莫　怨　仔　不／莫怨小郎行路深
蓮州半嶺日便夜　問妹可憐不可憐
不　怨　仔　不怨風流路来遠
難為風流行夜路　十分辛苦又可憐
傳　報　妹　説報大王姉妹齊
郎来因為路遥遠　大家有意接郎来
聴着路遠来接仔　難為今夜到娘郷
蓮州嶺上見誰怪　報郎有怪莫包藏
蓮州半嶺見小怪　得見山猪随路来
家主聲聲還良愿　金銀財白掃入街
伏　問　仔　借問行平連大郎
行平嶺上見誰怪　報郎千万莫包藏
行平嶺上見着怪　得見山猪作笑行
家主聲聲還良愿　金銀財白掃入堂
伏　問　仔　問仔伏霊連大親
伏霊嶺上見誰怪　誰怪行来説報人
伏霊嶺上見小怪　得見烏亀攔路綿
家主聲聲還良愿　金銀財白掃入庁
伏　問　仔　問仔伏江連大双
伏江嶺上見誰怪　誰怪代来説報郎
伏江嶺上着見／下上怪　得見野狸飛過天

家主聲聲還良愿　　五谷豊登千万年

一女問：お尋ねします。どの州のどの県の方ですか？　何しにいらしたのですか？　門前で鼓を打ち、歌堂を歌うなんて。

一男答：お尋ねにならないでください。連州から来たのです。連州から山を半分来たところで夜になりました。あなたは私を気の毒だとは思いませんか？

二女問：お尋ねします。どの道から来たのですか？　どうしてこんなに遅くなったのですか？

二男答：答えましょう。遠いからです。連州から山を半分来たところで日が沈みました。まだいい方です。その日のうちに着いたのですから。

三女問：お尋ねします。どちらからいらしたのですか？　明るいうちに何で着かなかったのですか？　何でこんなに遅くなったのですか？

三男答：お答えします。小さい声で劉三娘に答えます。お聞きしたところご主人は還家愿をなさるそうで私は参加しに、歌いに来ました。

四女問：お尋ねします。遠くからいらした厚意の方でしょう。還家愿があると知っているようですが、誰が歌堂があるといったのですか？

四男答：三日前にあることを知っていました。主人は厚意があり私も厚意があります。真心を込めてこのためだけに参加したいと来ました。自分のことを怒らないで遠くて遅く着いたことを。

五女問：疑っていました。理由もなくあなたを責めてつらい思いをさせてしまいました。あなたが私のところに来てくれ申し訳ありません。ハンサムボーイに夜道を来てもらってもともと遠かったのが分かりました。

五男答：自分を恨まないでください。道が遠かったのだから。連州から山を半分来たところで夜になりました。あなたは私を気の毒だと思いませんか？

六女問：恨みはしません。ハンサムボーイさん遠路はるばる来てくれて怒らないわ。疑っていたけれどご苦労さま。

六男答：先に着いている三人の女性は大王の娘です。盤王のために来たのです。遠くから来て皆集まっていて女性たちは歓迎して待っていました。

七女問：遠くからいらしたのに、あなたを責めてつらい思いをさせてしまいました。連州の山を越える時奇怪なものを見ませんでしたか？　もし怪しいものに会ったら、隠さないでください。

七男答：連州の山で小怪を見ました。猪がついて来ました。家で還良愿を盛大にやっています。金銀財帛がくっついて来て、家に入って来ました。

八女問：お尋ねします。行平大郎にお尋ねします。行平の山を越える時、何か奇怪なものを見ませんでしたか？　隠し事をしないでください。

八男答：行平の山を越える時怪を見ました。猪が笑ったのを見ました。家で還良愿を盛大にやっています。金銀財帛がくっついて来て家に入って来ました。

九女問：お尋ねします。伏霊大郎にお尋ねします。伏霊の山で怪を見ませんでしたか？　どうぞどんな怪に会ったか、ちゃんと話してください。

九男答：伏霊の山で小怪を見ました。亀が道をふさぎ寝ていました。家で還良愿を盛大にやっています。金銀財帛がくっついて家に入って来ました。

一〇女問：お尋ねします。伏江のお二人にお尋ねします。伏江の山で怪を見ませんでしたか？　どうぞどんな怪にあったか、ちゃんと話してください。

一〇男答：伏江の山で怪を見ました。狸が飛んで天を横切ったのを見ました。家で還良愿を盛大にやっています。五穀豊穣が末永く続くように。

以下は文献Z-26を使用する。

正是連州聰明仔　歌曲聲聲到仔邊
千般百様都報盡　無人生能仔聰明
郎来門前站一夜　一得主人門搨開
難為主人来接仔　相賀家主百様齊
難　為　仔　難為貴仔好心機
一心開了把郎入　接郎入屋讓神思

湖南大門雙搨開　得見大王百様在高台
紅羅沙帕都掛盡　大王姐妹都来齊
左手執郎長沙鼓　右手接郎好貴鈴
連州貴郎行到外門外　少郎雙手接入庁
多謝郎情天様大　多謝郎情糖様甜
主人開門把郎入　正是有心有意人
左手接郎横笛吹　右手接郎好貴鑼
伏靈／江貴人行／到外門外　小郎雙手接入堂
難　為　仔　難為貴仔好心機
家主聲聲還良愿　大家有意讓神思
門前石壁能花開　主人有事請神来
主人有事請神到　郎来今夜唱歌堂／詞

一一女問：頭のよい連州の人たち。歌いながらやって来ました。種々な怪についてみんな話してくれました。とても頭のよい人たち。

一一男答：門の前に一晩立っています。ずっと門を開けてくれませんでした。お手数をお掛けしますが、迎えてください。ご主人を言祝ぎにすべてそろいました。

一二女問：お手数をお掛けします。あなたは心掛けがよく、ありがたいです。誠心誠意門を開けてお入りいただきます。あなたを入れ、一緒に神に感謝します。

一二男答：湖南大門が開かれます。大王を祀る儀礼の場ができています。紅羅帳も貼られ、大王の娘も集まっています。

一三女問：女性の左手で男性の鼓を招き、女性の右手で男性の鈴を招きます。連州から貴人がやって来ました。若い男性の両手をもって大庁に招きます。

女　：感謝します男性の情は天のように大きい。感謝します男性の情は沙糖のように甘い。門を開け男性を入れます。

本当に心があり厚情の人です。

女　：左手で男性のもって来た笛を受け取り、右手で男性のもって来たドラを受け取ります。伏霊、伏江からやって来た貴人は門の外に到着し両手を取って部屋に招きます。

女　：ありがたい。とてもよい心の方でありがたい。家では還良愿を行ない、みんな誠をもって神に感謝します。

女　：門前の石垣の花が開きうれしい。主人は心を込めて神を招きます。主人は真心をもって神を招き、男性は今夜歌堂で歌います。

状況としては、主家で歌堂があると聞き、連州、行平、伏霊、伏江から歌を歌いに来訪した男性と主家の女性との問答である。この問答は本来男性と女性との間で行なわれたが、今は祭司たちが代わりをしている。

初め女性は来訪者をなかなか受け入れようとせず、すでに歌を歌う三人の娘は着いており、到着の遅れを責める。後に受け入れるが、道中怪しいものに出会わなかったか尋ね出会ったことが伝えられる。怪しいものは吉祥で福をもたらすと考えられており、男性は福を携え訪れたこと、家に福がもたらされたことを言祝ぐ。さらに来訪者によってもたらされた楽器（長鼓・笛・ドラ・沙板）が受け取られ、訪れが歓迎される。

来訪者は焼畑による移住を繰り返してきたヤオ族[30]の移動地点の連州、行平、伏霊、伏江からやってきたとされる。この移動地はそこで活躍したと思われる祖先とも結び付けられて記憶される地であり、ヤオ族の民族の歴史にかかわる地である。祖先神のいるとされる地からの来訪者だからこそ最終的には福をもたらす存在として受け入れられるのだが、その正体を確かめるための問答が繰り広げられている。

この歌問答の後、口語でも、「怪を見たか？」「見た」というやり取りが行なわれ、周囲から笑いが生まれる。

問答(3)は長鼓舞を主厨官が舞うにあたり、玉簡を弟子が背から後ろに落とし鼓を作る「做鼓」を表現し、主厨官が笹で玉簡の上下を巻き鼓を用意する「置鼓」を表わし、さらに玉簡をもちしゃがみ鼓の出来を試す「試鼓」を表わし、その後木を切り長鼓を作製する内容の問答(3)

どこへ行った？　山へ

何をしに？　木を切ってきた

何にする？　長鼓を作る

を行ない。さらに祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）の「唱鼓木出世歌」にある梓木で美しいよい音の鼓が作られ歌堂で打ち鳴らされる内容を読誦し、鼓の音を聞く「聴鼓」を表わす。その後主厨司によって長鼓の舞が舞われるが、厨官の長鼓の舞は本来、瓢洋過海の様子、還盤王愿の儀礼、餅つき、叩首、楽神、家作り、農耕（焼畑）、度戒儀礼の磨刀の場面等を表現する七十二の動作からなる。二人で演ずるのがよいとされる。実際に舞われたのは、測量、地を掘る、木を植える、木を切る、木を立てる枠を作る、地を掃く、鋸で板にする内容であった。長鼓の舞を行なうにあたり長鼓の作製から始め、長鼓の舞ではヤオ族の歴史や生活や祭祀という重要な内容が身体によって表現される。

さらに祭司は『善果書〇乙本』（文献Z-16）の「出門外園堂」を読誦し、歌堂の場で大歌を歌う「唱歌堂」を表わす。

問答(4)は『大歌書一本上冊』（文献Z-19）が盤王大歌声音のフシ回しで歌われ、ツアンガー（現地語）される。三十六段あるとされる目次は、

起声唱、初入席歌詞、隔席唱、論娘唱、日出早、日出晏、月正中、日正斜、月落江、月落西、月落流、夜黄昏、夜深闇、夜深深、天星上、天上星、月亮亮、第一洪水沙曲、天大旱、天柱倒、洪水発、洪水浸、北辺暗、天暗烏、葫芦叫、葫芦熟、見大怪、伏羲相合、為婚了、第二三峯閑曲、造天地、置天地、唐王出世、平王出世、信王出世、第三満段曲、大盤州、小盤州、第四荷葉盃曲、桃源洞、閭山学堂、造寺魯班、花巧、橙古何物、第五南花子曲、彭祖、郎老、第六飛江南、不倒地、船到水、神去也、第七梅花大盌有頭無尾歌詞

と記されている。その目次にある大歌の一段一段の冒頭部分は問答形式で読誦される。

『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の部分を例にすると、

唸（意味は何、読みはニャン）話唸村唸堂到
唸上唸頭何後来
唸堂到

図５　主厨官の長鼓の舞

図４　戸口で来訪者の男性と主家の女性の問答が行なわれる。

唸上唸頭唸後行
唸小唸聲唸聽後
唸得唸来唸也来
唸聽後
唸得唸来唸也行

と一人が歌うと、もう一人は本文に従い、

人話郎村歌堂到（人の話では男の村で歌の祭りがあるそうだ）
踏上船頭聽後来（船の舳先に登り、聞いてから来る）
歌堂到（歌の祭りがある）
踏上船頭聽後行（船の舳先に登り、聞いてから行く）
郎小聽聲又聽後（彼は音を聞いて聞いてから）
聽得娘来郎也来（聞けば彼女が来れば彼も来る）
又聽後（聞いたら）
聽得娘来郎也行（聞けば彼女が来れば彼も来る）

と答える。

一人が七言上下句四句を、一句の一言、三言、五言、二句の一言、三言、五言、三句の一言、三言、五言、四句の一言、三言、五言を唸（ニャン、何の意味）に置き換え歌うと、二人目が唸部分に回答を入れ歌う。この時文面通りではなく、一句七言、二句七言、一句七言の末三言を繰り返し、二句七言、三句七言、四句七言、三句七言の末三言を繰り返し、四句七言を歌う。詞章は七言上下句が対となり四句でひとまとまりを構成し、実際の歌唱は、反復が繰り返される。謎掛けと謎解きの問答が歌唱される。詞章は四句を一組とするが、最初の段は一句目の「人話郎村歌堂到」を必ず一句目に据え反復させて進められる。

『大歌書』には七言上下句で構成される大歌の詞章だけでなく間にレイチュー（現地語）のフシ回しで歌われるとされる「曲」（七韻曲）がはさまれる部分があるが、その後に続く七言上下句の大歌の詞章も冒頭の類頁は問答形式で歌われる。

問答(5)は「曲」が歌われる時には、その前にまず主厨官が線香をともし、祭司が沙板を鳴らし、

図６　文献Z-19 問答４の事例の原文該当のページ

問　青天白日　　答　白日青天
問　各歌乱唱　（それぞれ歌う）　答　乱唱乱排　（めちゃくちゃに歌う）
問　乱排乱唱　　答　唱歌唱曲　（歌と曲を歌う）
問　唱曲唱歌　　答　唱到第一洪水沙　（第一洪水沙に歌い至る）
問　伸過第一洪水沙　（第一洪水沙に至る）　答　唱得句句也是歌　（歌っている一句一句は歌）
問　唱得句句也是曲　（歌っている一句一句は曲）　答　唱得有頭有尾之歌　（始めと終わりのある歌を歌う）
問　不得唱得無頭無尾之歌（始めと終わりのない歌は歌わない）　……

の掛け合いが行なわれる。前者の下句を受け後者が反復させ、次々と繋いでいく。その後「曲」に合わせた調子を合わせるための「拉里連郎里拉利　連郎拉里利拉里　里呀連郎利　連郎拉里利拉里」（「洪水沙曲」用）等の間奏が歌われ「曲」に入る。「拉里……」は調子のずれを修正するために「曲」の間にも入れられる。「拉里連郎里拉利…」は言語的な意味は不明であるので、呪術的な詞章であると考えていたが［廣田　二〇一一ｄ］、「曲」の調子が表わされ「曲」ごとに異なる調子を取っているので「曲」の調子を思い返すための実質的な役を果たしている。

問答(6)は『大歌書一本下冊』（文献Ｚ-20）に進むにあたり、歌書を管理している劉三妹娘の書棚から、下冊を取り出して歌の場に戻ってくる様子を問答形式で表現する。

問　何楽嶺　何楽生子何楽源何楽山
　　人話石榴何生子何楽生子出何源出何山
答　石榴嶺　石榴生子石榴源石榴山
　　人話石榴要生子　石榴生子出深源
　　要生子　石榴生子出深山

源山部分を旗／埂、排／崩、河／洞、儺／垻、沟／田、京／州、郷／村、街／院、楼／門、庁／房、京／棹、廂／書の順に置き換え、さらに廂書から源／山へとさかのぼって置き換え、歌の場に歌書を導くための道筋が示されており、この問答を行なうことで下冊が歌の場に取り出されるとされる。問いの〝何〟の部分に回答を入れて答える形式となっており、今の段階で解読は難しいが「どこの山に、何の木の実、どこの源／どこの山、人は石榴が何の実をつけ、どこの源／どこの山に生えるか？」「石

榴の山に、石榴の実、石榴の源／石榴の山、人は石榴が実をつけ、石榴の実は源／山にあるという」と読むことができ、謎を掛けて謎を解く問答であることは明確である。現実に存在する歌書はあたかも歌の魂を劉三妹娘からいただいてこないと真実の歌詞や歌唱にならないと考えられているかのようであり、歌書が祭場に至る道順が謎掛けで説かれているのである。

問答(7)は、大歌の「又何物段」部分で、問答形式で構成され、冒頭部分を例にすると経文の文面の七言上下四句は、

何物変　　変成何様得娘連（何に変われば、何に変われば彼女に繋がることができようか）
得郎変成銀梳子　　上娘頭上作横眠（彼が銀の櫛に変われば彼女の頭の上で横になって眠ることができる）

とあるが、実際には、

問　何物変　変成何様得娘連　（何に変われば、何に変われば彼女に繋がることができようか）
　得郎変成何様子　上娘頭上作横眠（彼が何に変われば彼女の頭の上で横になって眠ることができるだろうか）
　何様子上娘頭上作横眠　（どうすれば彼女の頭の上で横になって眠ることができるだろうか）
答　容易変　変成一様得娘愛　（変われる　一度変われば彼女のハートをつかめる）
　変成二様得娘連　（二度変われば彼女に繋がることができる）
　容易変　変成二様得娘連　（変われる　二度変われば彼女に繋がることができる）
　得郎変成銀梳子　（彼が銀の櫛に変われば）
　上娘頭上作横眠　（彼女の頭の上で横になって眠ることができる）
　銀梳子　上娘頭上作横眠　（銀の櫛なら彼女の頭の上で横になって眠ることができる）

と歌唱される。女性の頭から足元まで身に着けるものに男性が変身する内容が続くが、本文の七言上下句四句のうち三句目と四句目が何に変身するか、変身するとどのようかという答えになっており、それを引き出すために、一定の調子が繰り返される。「何に変われればよいのかな、何に変われば○○になるかな?」「簡単簡単何に変われればよいかって、○○に変われば○○になる」のように謎掛け形式で次々と反復展開される。実際の歌唱法は極めて複雑であり、経文の文面を一見するだけでは、歌唱法まで理解することはできない。

問答(8)は、

酒是何人酒　棹是何人棹　何人声々還良愿　酒是大王酒　棹是大王棹　家主声々還良愿　何人棹上得分明　大王悼得分明

（酒は誰の酒　船の櫂は誰の櫂　誰が還家愿を行なうのか　酒は大王の酒　櫂は大王の櫂　施主が還家愿を行なう　誰が船のこぎ方を分かっているのか　大王が船のこぎ方を分かっている）

片付けることを盤王に知らせる内容で、帰りの船も作り、供物も載せ、神を送る支度をする中、あえて問い掛けで、謎掛け謎解きの形式を取り、祭祀の終わりを予告しお帰りいただくように促している。

その他の問答としては、直接的な歌問答でなくても、歌の進められる前後には対をなす内容の読誦が見いだせる。

『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の最初にある「坐席三幡」が読誦される（27、19日21時30分頃～）が、その内容と下冊に入る前に読誦される『大歌書一本上冊』（文献Z-19）の最後に加えられた（28、20日3時頃～）「接鈴用」の内容を比べると、明らかに対をなしているといえる。「坐席三幡」では、「大歌の作者である劉三妹娘の歌詞と受け劉三妹娘の歌声を受け取らないうちは、粗末な言葉で連州、行平、伏霊、伏江、五旗、家先の心にかなうものではない」としているが「接鈴用」では「劉三妹娘の歌詞と声を受け取って貴い言葉で神々の心にかなったものである」としており、前を受けて後で展開されていることが分かる。

八、儀礼のテーマ―盤王との契約と履行―

還家愿儀礼の目的について諸研究者の論が展開されているが[31]、本稿においてもこれまでの研究を引き継ぐ部分とさらに新しく展開できる部分がある。いずれにせよヤオ族にとっての盤王伝承とは儀礼知識、テキストの記述、口承の伝承等多様な面をもち、なおかつ伝承内容は複数存在し、それぞれが複雑に関連して矛盾なく存在しており、綿々と引き継がれる儀礼の根幹を形成しているといえる。最後に還家愿儀礼の主題に関連する事柄を現地の方々への聞き書きから得た知見も加え、列記してまとめる。

1、ヤオ族の儀礼にかかわる神々は道教系の神々、梅山系の神々、盤王に関連する神々、灶神、土地神とグループ分けでき、ヤオ族の霊界は多くのシンクレティクな諸神が大きな神統をなしているといえる。

2、掛灯儀礼を経ることで家を継ぎ先祖の祭祀を行ない家先単に名を連ねる資格を得るが、この時道教神の三清と師弟の縁を結び[32]、法の師は太上老君と考えられている。

3、盤古は創世神であるとされる一方でテキストでは盤王グループに入れられ、福江廟に吸収され、盤王と混同されている。さらに祭司によれば盤古は太上老君の父であると認識されている。

4、テキストの記述によると盤王は西天福江に生まれ、辰の時を生死の日時とし、犂を使った農耕や高機を用いた苧麻織りを行なったとある。さらに、連州の唐王、行平の遊師、伏霊の五婆、厨司の五旗と並んで三廟王あるいは四廟王とされ福江の地に結び付けられている。地名と結び付けられた神々は、ヤオ族が長年にわたって移住を繰り返してきた記憶といえるのではないかと考える。現地の方は三廟王の中でも盤王を特別と考え、救世主の盤王（ビエンフン）さらに龍犬盤瓠[33]（盤護）とも一致すると考えている。

5、現地の方は盤王は祖宗・祖先神と考えており[34]、入口正面中央は盤王（三廟）を祀る場所とし、家の直接の先祖の祭壇は正面をさけ、左右どちらかに寄せて作る。

6、神話にあるように海を渡り遇難した際、盤王に救いを求め願を掛け、無事に上陸できたので、誓いを果たす祭祀を行なうようになった。盤王との契約関係は、現在に至り引き継がれ、盤王は救世主だけでなく祖先神として子孫の祈願の対象であり続け、願ほどきの祭祀が続けられてきた。

7、還家愿儀礼の前半では、家々で以前立願されたことへの願ほどきが行なわれ、後半ではかつて神話世界で行なわれた願掛け願ほどきが再現されている。家々の大願成就の願ほどきには盤王の祭祀は必須とされている。全体を貫く重要なテーマは盤王との祭祀契約と履行といってよいのではないかと考える。

8、神話や歴史を叙述する大歌の詞章は祭祀性の強いとされる七言からなるが、祭祀の場において読誦歌唱という形態をとって表出されることで、より一層呪力が発揮されると考えられていると推測する［廣田　二〇〇九］。神の声によって、七言の調子でヤオ族の重要な民族知識が伝えられることに意義があるといえる。『大歌書』の読誦歌唱は多くの場面で問答形式を取り、謎掛けと謎解きが行なわれ、祖先の移住が記憶されている地から来た来訪者との遭遇が表現される。謎掛けと謎解きは極めて重要な意味をもつが、民族の知識を引き出し、民族の歴史を学習する仕掛けともなってる。さらに謎掛けにより知りたい欲求も増長され修辞的反復繰り返しにより民族知識の定着に繋がることになる。もともと対句と反復は儀礼において重要な意味をもつとされるが[35]、『大歌書』においても複数の修辞の反復が確認でき、民族の神話や歴史に記述された『大歌書』の読誦歌唱における反復は祭祀において歌われる歌謡の特性といえる。

藍山県の還家愿儀礼における盤王伝承をさらに広げ、ヤオ族全体の儀礼体系から捉える必要がある。藍山県で収集したその他のテキストをはじめとして同省の近隣の江華県、資興市、隣接する広東省の乳源、広西チワン族自治県の賀県、大瑶山のテキストに盤王に関する同様の内容の記述が見出せる。さらに南山大学人類学博物館所蔵の白鳥調査団が北タイで収集したテキストや収集地不明であるが、ミュンヘンのバイエルン州立図書館及びオックスフォードのボードリアン図書館に収められたテキストにも同様の記述を確認した［廣田　二〇一〇a、二〇一〇b、二〇一一a：三六一–三七八、二〇一一c、二〇一二］。これらテキストを用いて過山系のヤオ族に共通する祭祀が行なわれたと考えられるので、盤王への祭祀の契約と履行という主題は、藍山県の還家愿と同類のヤオ族全体の祭祀儀礼に共通するといっても過言ではないと考える。

注

（1）二〇〇六年馮家で実施された還家愿儀礼では馬元帥の軸を加え、十八種であり、貼る順番にも違いが見える。［廣田　二〇一一a：三二〇］

（2）太字にした儀礼は、神像画の軸を掛けて行なう諸儀礼に共通する骨格となる儀礼を示す。

（3）祭司によれば①と③と④の願を掛ける対象となる神は、上壇兵馬・下壇兵将・福江盤王・五龍司命・灶君・宅住竜神・衆位祖宗家先・神王神将・仙妹姐妹とされる。

（4）同じく②と⑤の願を掛ける対象となる神は、連州唐王聖帝・行平十二遊師・福江盤王・伏霊五婆聖帝・五旗兵馬・衆位祖宗家先とされる。

（5）祭司に対して儀礼を依頼する際送られる包み。中に塩が入れられており、表面に盤王と記されている。

（6）馮家の願書の事例でも、願掛けと献上紙馬の額、同時に盤王祭祀を行なうと見える。［廣田　二〇一一a：五五三–五五四］

（7）神奈川大学プロジェクト研究所　ヤオ族文化研究所収集の文献の分類番号

（8）丸山宏により校訂された資料を使用。

（9）『請聖書』（A–32a）に上壇兵馬、下壇兵馬の内容が見える。［神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：六二］

（10）松本浩一はテキストにある神名を道教系、梅山系、盤王、灶神、土地神グループに分類分析している。［松本　二〇一一：二四−二四］

（11）度戒儀礼でいまだ掛家灯のイニシエーションを受けてない受礼者のために行なわれる補掛三灯において唱えられる内容は、還家愿儀礼の掛家灯と共通するので資料として用いる。［神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科　二〇一一：三七−三八］

（12）丸山宏は、度戒儀礼で使用される文書の文面から、老君が法の師であると考えられていると指摘している。［丸山　二〇一一］

（13）テキストは七言の上下句が対となり構成され、漢語読みされるのではなく日常生活で使用されない特別なヤオ語読みで読誦される。

（14）二〇〇六年の馮家の還家愿儀礼で使用されていた『賞光書』の「盤王歌」の記述は共通しているが、盤古が盤王とされ、混同されている。［廣田　二〇一一　a：三六一−三六三］

（15）藍山県のその他の複数のテキスト『賞光書』（A−30a・A−19・Z−23）に収められた「盤王歌」には、「盤古（王）得病是辰日、盤古（王）得病是辰時」とある［廣田　二〇一一　a：三六一−三六五］。この部分は不完全であるといえる。

（16）／はその前後の文字が二行に分けて表記されることを表わす。

（17）二〇一三年長沙で、還家愿儀礼の施主及び祭司たちに対して聞き取りを行なった。

（18）原文は伏とする。

（19）「接福江廟」は『善果書〇乙本』（賞光書・歌堂書Z−16）にも収められており、「相賭釋迦要相賭」とされ、資興市のテキスト『大堂歌書』には、「相賭盤王愛相賭」とあり、今後詳しく校訂の必要があるのでここでは取り上げない。

（20）原文では蔴字は小さく右に書き加えられており、孫蔴績とする。

（21）原文は曲江とある。

（22）既出の他のテキストでは生は坐とする。資興市のテキストでは賭とされている。『盤王大歌』B−3では坐とあり、この全訳は［廣田　二〇一一b：一六七−一一六］参照。

(23)『盤王大歌』（文献B-3）には「盤王起已閏犁頭／耙」とある。
(24) 同じく「犁耕／耙」とある。
(25) 同じく「高起枷／機」とある。
(26) 同じく「盤古流傳十二面」とある。
(27) 盤王大歌はヤオ語で歌われ、歌い方にも特徴があり、二人の祭司が問答形式で歌ったり、七言の上下句を上句七言→下句七言→上句の下三言→下句七言と歌ったりと大変複雑である。
(28) 盤王愿儀礼において招聘される神々は、文献（C-3）にあるように、いくつかのグループに分けることができる［松本　二〇一一］。連州唐王グループは、龍王、〔亜＋田〕教四王、起刀五王、托天六王、置山七王、盖天八王、南楼九王、楼上相公、地下羅任秀才、門前進壇十丈、竜古聖人、竜依竜十七官、貴依唐十八官、長衫長聖九娘、長衫長聖十娘、里頭便請唐十五娘、花窮便請唐衫十娘、里頭出門托帯小王、小王出門托化前占夫人、後古夫母、連山盖山童子、青衣女人で、連州大廟に属するとされる。
行平十二遊師グループは、大堂高〇六位師主、大堂高〇六位師傳、藤家師、坭家師、落家滅家師、色家師、奉家師、泰家師、李師、兪家師、楼泥三唱、楼坭四唱、十二歩刀梯、十二面莉床含梨、潑沙漢病使者、退病使者、師公、師男、師孫、師公、師色で、行平大廟に属するとされる。
福（伏）霊五〔浦＋女〕グループは、伏霊聖公母、左〇母手、過雲右手過雲順手、過雲太白聖人、置皷一郎、置皷二郎、横吹竹黄三郎、拍板四郎、長沙木皷五郎、〇頭六郎、〇尾七郎、王上楼桃花妹妹、下楼流鑼仙娘、前門強琶、後門立椅、後生年少唱歌、有叚劉三妹娘で、伏霊大廟に属するとされる。
福江盤王グループは、盤古郎老聖人、金童、玉女、黄趙二位、〇禾花姉妹、五谷仙娘、李家李請書丁、劉一劉二仙童、把瓶献瓶郎官、許愿童子、把愿判官で、福江大廟に属するとされる。
厨司五旗兵馬グループは、東門五旗、南門五旗、西門五旗、北門五旗、中門五旗、撑船過海踏馬、過街、寄書、寄話、寄文、寄語五旗、真硃小筆、磨墨二郎、把瓶童子、献郎官五旗で、厨司大廟に属するとされる。
陽州衆位宗祖家先は、家先単に記載されている直接の先祖を示す。
道教の神々ではなくヤオ族の祖先神の名が連ねられている。

（29）いわゆる『盤王大歌』と総称されるヤオ族の伝承には創世神話等の神話叙事、民族の歴史叙事、祖先にまつわる種々な伝承等が含まれている。広西・湖南の過山瑤が行なう、還盤王愿で歌われる『盤王大歌』は七言を主とし三十六段または三十二段、または二十四段または十八段から構成され、さらに七任曲と称される曲調を異にする七つの歌を加えて成立するとされる。

湖南省藍山県滙源郷湘藍村馮家で実施された還家愿儀礼で実施された時使用された『盤王大歌』（文献B-3）は、起声唱・齊入席・隔席唱・論娘唱・日頭出・日正中・日落江・日落西・日落鳥・日頭過江・夜深深・夜黄昏・天上星・月亮亮および第一紅紗曲、次に天大旱・見怪歌・天暗烏・北邊暗・洪水発・雷落地・葫蘆・伏羲・洪水盡・為婚了および第二山逢閑曲、次に造得地・置天地・唱王打水・深山竹木・唐王出世・信王出世・玉女梳頭・白涼扇・坦傘・盤王出世・石崇・富貴・琵琶頭・紗板・魯班および第三満段曲、次に楼上伏門・大婆女・説婚早・劉山・秀才・師人・十二遊師・鳥雲生・五婆見・英台・山伯・生時・大州大・大州・老鼠・大缸・石榴生および第四葉荷葉で成立している。［廣田　二〇一一a：三六九、二〇一三f］

湖南省江華瑤族自治県で収集された乾隆年間の手抄本を整理した『盤王大歌』（中国少数民族古籍瑤族古籍之一湖南少数民族古籍弁公室主編　岳麓書社　一九八七年）は内容が充実していると考えられるが、起声唱・日出早・日正中・日斜斜・種竹木・唐王出世・盤王出世・盤王献計・流羅子・琵琶頭・石崇富貴・歌一段・魯班造寺・梅花曲・雷落地・郎老了・彭祖歌・夜深深・大小星・月亮亮・黄条沙・天大旱・天地動・天地暗・北邊暗・見大怪・相逢賢曲・造天地・万段曲・送神去・亜六曲・荷葉杯曲・桃源洞歌・四字歌・放猟狗・夜黄昏・何物歌・盤州歌・南花子曲・閭山歌・梁山伯・鄧古歌・飛江南曲から構成されている。

広西チワン族自治区の賀県で収集された『盤王大歌』（中国少数民族音楽古籍叢書之一盤承乾等収集整理　天津古籍出版社　一九九三年）は、起声唱・輪娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落江・黄昏歌・夜深深・大星上・月亮亮・黄沙曲・天大旱・見大怪・北邊暗・雷落地・葫蘆暁・洪水尽・為婚了・三逢延曲・造天地・種竹木・三更深曲・盤王出世・盤王起計・富貴竜・荷葉杯曲・梁山伯歌・南花曲・桃源洞・閭山学堂歌・造寺歌・飛江南曲・何物歌・彭祖歌・梅花曲・亜六曲で構成されている。

一九六〇年代に広西チワン族自治区大瑤山瑤族自治県三角公社で収集された『盤王歌』（広西民族学院中文系民族民

間文学教研究翻印　一九八〇年）は、起声唱・初入席・隔席唱・論娘唱・日出早・日正中・日斜斜・日落紅・日落西・夜黄昏・夜深深・天上星・月亮亮・天大旱・見大怪・天地動・天暗烏・北邊暗・雷落地・伏羲姉妹・葫蘆・洪水発・洪水天・造天地・烏雲生・大盤計・小盤計・桃源・閭山学堂・魯班造寺・何物・鄧古・彭祖・郎老了・放猎狗・歌船・第一黄条沙・第二三峯寒・第三暁段曲・第四荷葉盃・第五南花子・第六飛江南・第七梅花で構成されている。張勁松によれば本事例と同県藍山県桐村の『盤王大歌』は、第一章は日出早・日正中・日斜斜・日落西・日落崗・夜黄昏・夜深深・天星上・大星上・月亮亮のほか、第一曲黄条沙を加えて構成され、第二章は、天大旱・見大怪・天地動・天柱倒・天暗烏・北邊暗・雷落地・洪水発・洪水尽・怕不合・為婚了のほか、第二曲三逢閑を加えて構成され、第三章は、造得天・造得地・造得火・置山源・置青山・相説報・唐王出世・盤王起計・邀娘売・白涼扇・富貴竜・琵琶竜・喽羅真のほか、第三曲万段曲を加えて構成され、第四章は、賜嫁早・劉岭大・烏雲生・梁山伯・大州大のほか、第四曲荷葉杯を加えて構成され、第五章は、桃源峒・閭山鳥・閭山青・入連洞・会造寺天字大・鄧鼓歌のほか、第五曲南花子を加えて構成され、第六章は、何物変・得郎変・何物輪・何物爛・何物死・彭祖生・彭祖死・郎老了のほか、第六曲飛江南を加えて構成され、第七章は、木倒地・船成了・船到水・送路去・帰去也・飲酒了・不唱了のほか、第七曲梅花相送を加えて構成されるとしている。（張勁松『藍山県瑶族伝統文化田野調査』岳麓書社　二〇〇二年　六三―六五頁）

資興市の祭司所有の乾隆四十二年の銘がある手抄本の『大堂歌書』には、起掣唱・論娘唱・〇入席・隔席唱・分〇唱・平平唱・日頭出・月正中・月斜斜・月落西・月落江・日頭過江・夜深蘭・夜深深・夜黄昏・黄昏・月亮・第一紅系紗曲・一片烏・二十八後・第二圍歌曲・天太旱・見怪歌・見怪路・見大怪・天柱倒・天暗烏・北邊暗・洪水発・雷落地・葫蘆歌・大州出・葫蘆熟・洪水発・洪水浸・為婚了・第二（ママ）圍三逢閑曲・造得地・造得天・置天地・仰歌曲・深山竹木・唐王出世・信王出世・盤王出世・白涼扇・坦傘・盤王歌曲・盤王起計・石崇富貴・琵琶・魯班・喽囉・第三圍満段曲・出嫁早・秀才・師人・十二遊師・鳥雲上・大州・英台・梁山・大舡・第四段荷葉歌曲・桃源・閭山・起造歌曲・造寺魯班・鄧古歌・遭小何物歌・第五段南花曲・唱何物歌・唱古人歌・郎老了・唱彭祖歌・唱第六段飛江南曲・唱送聖歌・舡成了・舡到水・送神去・第七段鴨六曲が並べられている。

その他の地域の『盤王大歌』は、湖南省江華瑶族自治県のテキストとして、鄭徳宏選編『瑶族経書』岳麗書社　二〇

○○年、広東省の乳源瑶族自治県のテキストとして盤才万　房先清収集・李默編注『乳源瑶族古籍滙編』上・下　広東人民出版社　一九九七年、広西チワン族の例が農学冠・李肇隆編著『桂北瑶歌的文化闡释』民俗出版社出版発行二〇〇八年にも収められている。

さらに中国以外の諸機関に所蔵されている『盤王大歌』については、バイエルン州立図書館はヤオ族写本を二七七六件所有し、うち八六七件が目録化されている。（Höllmann, T. O. hrsg. 2004 Handschriften der Yao Teil 1 Bestände der Bayerischer Staatsbibliothek München Cod.Sin.147 bis Cod.Sin.1045, Stuttgart : Franz Steiner Verlag）そのうち盤王崇拝にかかわる盤王書・盤王歌をはじめとし約二〇〇件を閲覧した。イギリスオックスフォードボードレアン図書館所蔵ヤオ族写本テキスト一四五件を閲覧したが、その中にも盤王歌を確認できた。南山大学人類学博物館所蔵白鳥文書のうち九箱に収められた約一六〇件の北タイのヤオ族写本を閲覧したが盤王歌を複数確認できた。［廣田　二〇一一c、二〇一三d、f］

『盤王大歌』の構成および内容について詳しく分析が試みられている書籍としては黄海・邢淑芳『盤王大歌―瑶族図騰信仰与祭祀経典研究』貴州民族宗教文化研究叢書　貴州人民出版社　二〇〇六年、鄭長天『瑶族坐歌堂的結構与功能―湖南盤瑶剛介活動研究』瑶学叢書　民族出版社　二〇〇九年がある。

(30) 吉野晃によるとヤオ族にとって焼畑に伴う移住が、神話、儀礼文書、個人的経験のレベルにも共通したものとされ、祖先以来連綿と続けられてきた「先祖伝来の営為」と認識されており、それは「単なる生業の種別だけでなく、水稲耕作などの定着農耕を営む他の民族と自らを弁別する特徴」ともなっているという。ヤオ族のアイデンティティーは移動し続けることを核とし形成されており、当然神話にも反映され移住の経緯が示されている。これは北タイばかりでなく藍山県のヤオ族にも同様に見られ、ヤオ族に共通するといえる［吉野晃　二〇〇一、二〇〇八］。

(31) 竹村卓二は、盤皇願儀礼の目的を太古ヤオ族の先祖が救世主盤皇と結んだ契約を履行することにあるとする［竹村一九八一］。吉野晃は、盤皇祭祀をユーミエンの祖先を救護した盤皇を祀る謝恩儀礼とする。掛灯はミエンの男子が通過すべき成人式であり、道教の道士叙任儀礼の形式を取るとし、功徳造成の修道儀礼とする。掛灯は家先と受礼者との祖先―子孫の関係を確立する儀礼であるとする［吉野　二〇一〇、二〇一一］。張勁松は、還家願は祖先祭祠を受け継ぎ、先祖を祭ることと除災招福を行なえる祭司になるために行なう。三代続けて掛灯と還願を行なわなければ、

祖先の盤王はその子孫として認めなくなるとする［張　二〇〇二］。李祥紅は、掛灯は始祖であり救世主である盤王の子孫としてその祭祀を継承すべく祭司になるために行なう。盤王祭祀は除災招福を意図していたが、後に願ほどきへと変化したとする［李　二〇一〇］。

(32) 大運銭において、受礼者の氏名生年月日を書いた紙が三清に近づけられ、貼り付けられる。［廣田　二〇一一：三三五－三三八］

(33) 丸山宏の聞き取り［丸山　二〇一〇］及び今回祭場外にコピーされた評王券牒が張り出されていることからも推測できる。

(34) 血統をいうのではなく、吉野晃の表現を借りれば比喩的な祖先を意味する。

(35) 山本直子「古代歌謡の対句と祭式儀礼」『同志社国文学』65　同志社大学国文学会　二〇〇六年　一－一〇頁

引用文献

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2011　神奈川大学歴民調査報告第12集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告』Ⅰ　神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2012　神奈川大学歴民調査報告第14集『中国湖南省藍山県ヤオ族儀礼文献に関する報告』Ⅱ　神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

2014　神奈川大学歴民調査報告第17集『南山大学人類学博物館所蔵上智大学西北タイ歴史文化調査団資料文献目録』Ⅱ　神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科

竹村卓二

1981　『ヤオ族の歴史と文化』弘文堂

張勁松

2002 『藍山県瑶族伝統文化田野調査』岳麓書社

廣田　律子

2009 「湖南省藍山県ヤオ族の還家愿儀礼の演劇性」『中国近世文芸論―農村祭祀から都市芸能へ―』東方書店　九九-一二八頁

2010 a 「文献に見る盤王伝承」『瑶族文化研究所通訊』第2号　ヤオ族文化研究所　五一-一五七頁

2010 b 「盤王伝承に関する研究」『ヤオ族伝統文献研究国際シンポジウム予稿集』ヤオ族文化研究所　七七-九〇頁

2011 a 『中国民間祭祀芸能の研究』風響社

2011 b 「「盤王大歌」―旅する祖先―」『万葉古代学研究所年報』第9号　万葉古代学研究所　一六七-二一六頁

2011 c 「資料紹介　文献に見る盤王伝承」『瑶族文化研究所通訊』第3号　ヤオ族文化研究所　六一-一七四頁

2012 「ヤオ族歌謡資源与創意―盤王歌を中心として―」『第二届国际瑶族伝统文化研讨会 ―资源与创意―会议论集』ヤオ族文化研究所　二五一-二七八頁

2013 a 「祭祀儀礼に見る旅―中国湖南省藍山県ヤオ族の通過儀礼を事例として―」『旅のはじまりと文化の生成』大学教育出版　二一〇-二四四頁

2013 b 「構成要素から見るヤオ族の儀礼知識―湖南省藍山県過山系ヤオ族の度戒儀礼・還家愿儀礼を事例として―」『國學院中國學會報』第58輯　國學院大學中國學會　一-二五頁

2013 c 「湖南省藍山県過山系ヤオ族の祭祀儀礼と盤王伝承」『東方宗教』第121号　日本道教学会　二〇一三年　一-二三頁

2013 d 「祭祀儀礼と盤王伝承―儀礼の実施とテキスト―」『瑶族文化研究所通訊』第4号　ヤオ族文化研究所　八八-一〇六頁

2013 e 「ヤオ族春節調査」『瑶族文化研究所通訊』第4号　ヤオ族文化研究所　一三三-一三六頁

2013 f 「ボードリアン図書館蔵ヤオ族テキスト盤王関連校訂用資料」『麒麟』第22号　神奈川大学経営学部17世紀文学研究会　五八-六八頁

松本　浩一
2011　「度戒儀礼に見える神々：呉越地方・台湾の民間宗教者の儀礼と比較して」『瑶族文化研究所通訊』第3号　ヤオ族文化研究所　二四-三四頁

丸山　宏
2010　「湖南省藍山県ヤオ族伝統文化の諸相―馮栄軍氏からの聞き取り内容―」『瑶族文化研究所通訊』第2号　ヤオ族文化研究所　二一-一二三頁
2011　「中国湖南省藍山県ヤオ族の度戒儀礼湖南省藍山県過山系ヤオ族の祭祀儀礼と盤王伝承文書に関する若干の考察―男人用平度陰陽拠を中心に―」『知のユーラシア』明治書院　四〇〇-四二七頁

ヤオ族文化研究所
2009　『瑶族文化研究所通訊』第1号　ヤオ族文化研究所
2010a　『瑶族文化研究所通訊』第2号　ヤオ族文化研究所
2010b　『ヤオ族伝統文献研究国際シンポジウム予稿集』ヤオ族文化研究所
2011　『瑶族文化研究所通訊』第3号　ヤオ族文化研究所
2012　『第二届国际瑶族伝统文化研讨会―资源与创意―会议论集』ヤオ族文化研究所
2013　『瑶族文化研究所通訊』第4号　ヤオ族文化研究所

吉野　晃
2010　「タイ北部におけるユーミエン（ヤオ）の儀礼体系と文化復興運動」『東アジアにおける宗教文化の再構築』風響社
2011　「〈掛三台燈〉の構造と変差：タイ、ラオス、中国湖南省藍山県のユーミエンにおける〈掛燈〉の比較研究」『瑶族文化研究所通訊』第3号　ヤオ族文化研究所　三五-四〇頁

李祥紅等
2010　『湖南瑶族奏鐺田野調査』岳麓書社　七七頁

※本稿は二〇一二年度～二〇一四年度科学研究費助成事業 基盤研究（B）「ヤオ族の儀礼知識と儀礼文献の保存・活用・継承」、アジア研究センター共同研究調査「湖南省藍山県過山系ヤオ族の言語学的研究」の成果の一部である。

図７　大運銭
右祭司は受礼者と三清の縁を結ぶ。左２名の祭司は莫莚をもち舞い豊穣を祈る。

図８　掛家灯　昇櫈
受礼者を太上老君の椅子に座らせる。

図９　竹筒に入れられ神龕に置かれていた願書

図10　盤王愿の送王で願書が消却される。

図11　盤王愿の祭壇　渡海神話の船を表わす豚の供儀